福井県庁周辺マップ

福井県 総務部 財産活用課

① 天守跡

天守跡には、68万石、御家門という福井藩の権威を象徴する四層五階の天守（高さ約30m）が建っていました。現在も大きな礎石が残っており、当時の様子を偲ぶことができます。

② 福の井

築城当時から現在の場所にあったと考えられ、城内の特別な井戸として扱われてきました。
「福井」の名の起こりとする説もあります。
平成29年に井戸枠や石積みを福井震災以前の姿に復元し、修景のため井戸屋形を設置しました。

③ 御廊下橋

御廊下橋は、藩主が本丸と三ノ丸御座所の往復に用いた藩主専用の橋です。平成20年に福井城築城400年を記念し、県と福井市が明治初期の古写真をもとに当時の姿に復元しました。

④ 山里口御門

御廊下橋側からの入口に設けられた城門で、約8mの高さの櫓門と棟門で枡形を形成していました。遺構調査を基に、福井城址公園整備の一環として平成30年に復元されました。

⑤ 散策路

木製の階段をのぼって、石垣の上を見学することができます。
福井城本丸の正門である瓦御門があった場所まで散策が楽しめます。

⑥ 結城秀康像

1574年（天正　2年）徳川家康の次男として誕生。
1584年（天正12年）豊臣秀吉の養子に出され、「秀康」を名乗る。
1590年（天正18年）結城晴朝の養子となり、結城家を相続し10万石の大名となる。
1600年（慶長　5年）関ヶ原の戦いの際、上杉への備えとして宇都宮城を守る。
1601年（慶長　6年）越前一国68万石を拝領し、福井城の改修に着手。
1607年（慶長12年）4月病床にあった秀康は34歳の若さで生涯を閉じる。

① 天守

1階と2階の間に屋根を設けない外観4層、内部5階の望楼型天守で、最上階には高欄があったと考えられています。建物自体の高さが約30mにも達する大型の天守で、屋根は笏谷石の石瓦で葺かれていました。

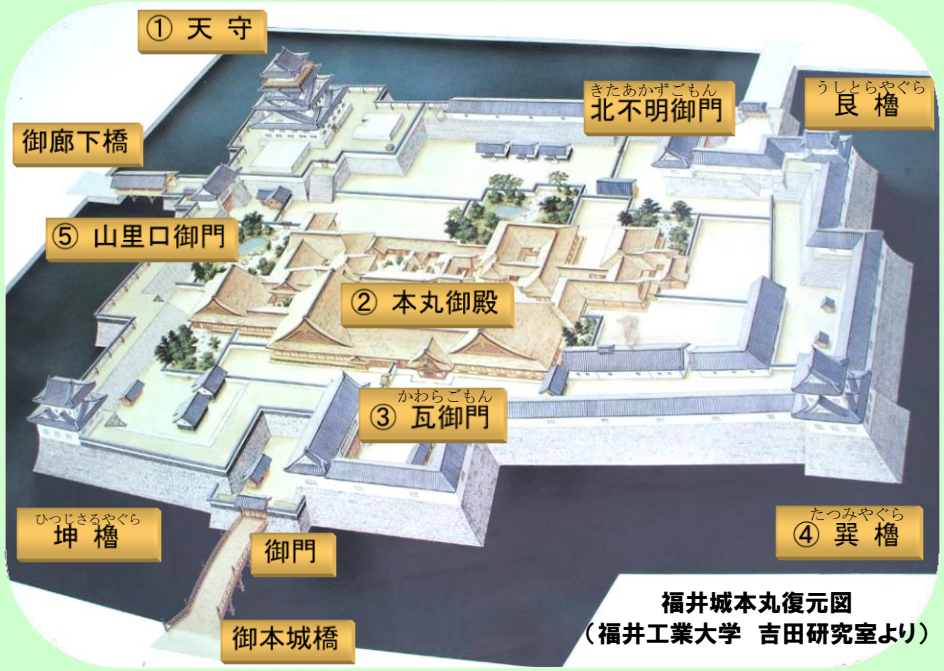
寛文9年（1669年）の大火で焼失し、以後再建されることはありませんでした。

② 本丸御殿

藩主が政務を行う場所で、現在の県庁舎の辺りにありました。約1000坪の広さがあったとされ、各部屋は障壁画で飾られていました。

寛文9年（1669年）の大火で焼失しましたが再建され、幕末までに何度か改築されています。

図は幕末期の本丸御殿を描いたもので、唐破風の玄関など格調高い構えとなっています。



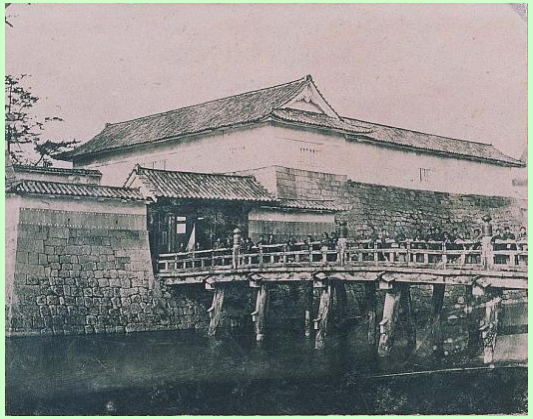
福井城本丸復元図
（福井工業大学　吉田研究室より）

福井城は慶長6年～11年（1601年～06年）に徳川家康の次男、結城秀康によって築城された平城です。かつては本丸を中心に二ノ丸・三ノ丸を同心円状に配した、四重・五重に堀を廻らす環郭式の縄張りを持つ大城でした。

上の図は、築城当初の福井城本丸の様子を復元したものです。

本丸には、北西隅に天守、北東・南西・南東の各隅に3つの櫓が建てられ、中央には、本丸御殿がありました。なお、堀と石垣は現在も残っています。

③ 瓦御門（かわらごもん）



本丸の正門としてつくられた櫓門で、二階の櫓部分の幅が約29mある巨大な門でした。

御本城橋を渡って最初にある御門と、この瓦御門とで方形の枡形を形成していました。

現在は、櫓部分が乗っていた南側（堀側）の石垣のみが残っています。

④ 巽櫓（たつみやぐら）

本丸の南東隅の櫓で、築城当初は二層の櫓として建築されましたが、寛文9年（1669年）の大火で焼失後、三層の櫓に建て替えられました。

大火後、天守が再建されなかったことから、同じく三層に建て替えられた坤櫓とともに福井城を象徴する建物として明治初期まで存在しました。

⑤ 山里口御門（復元）

山里口御門は、本丸の西側にあった西二ノ丸（山里丸）から御廊下橋を渡った入口に設けられていた門です。

松平慶永（春嶽）などの時代には、御座所（藩主の生活の場）が現在の中央公園にあったため、藩主は御座所から御廊下橋を渡り、山里口御門を通って本丸に入ったと考えられます。

門は、棟門と二階建の櫓門とで構成され、方形の枡形を形成しています。

遺構調査の結果を基に平成30年に復元され、屋根は笏谷石の石瓦で葺かれています。櫓門の二階は展示スペースとなっており、入場可能となっています。

［出典］天守復元図：福井工業大学吉田純一監修『復元体系日本の城 3北信越』ぎょうせい出版 所収
絵図、古写真：福井市立郷土歴史博物館保管

発行：福井県 財産活用課（Tel:0776－20－0252）